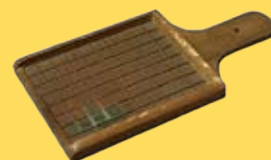


豊田市郷土資料館  
No.90

Toyota City Museum  
Of  
Local History

企画展



量をハかる「銭枰」

古い道具と昔の暮らし

会期：1/31（土）～4/12（日） 会場：第2展示室



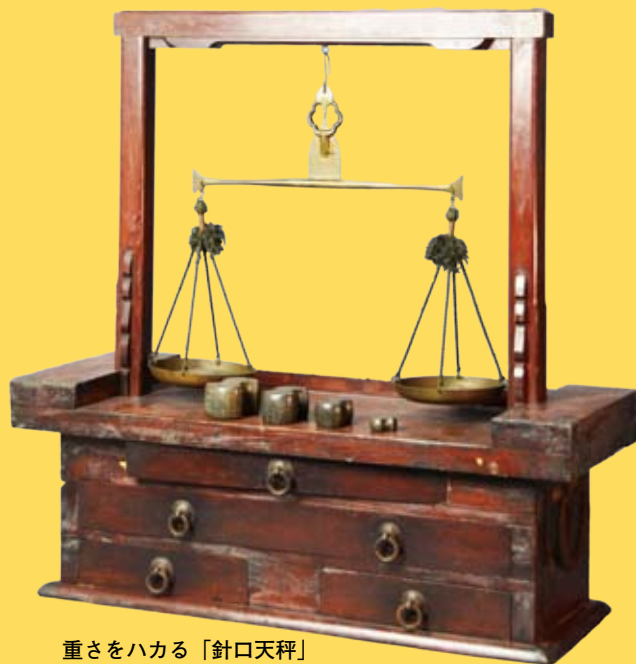
長さをハかる「検尺器」



時間をハかる「日時計」



時間をハかる「時計」



重さをハかる「針口天秤」

目次

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| ・ 豊田市郷土資料館企画展 「ハかる～古い道具と昔の暮らし～」     | 2   |
| ・ 民具調査だよりー16 時を計る道具                 | 3   |
| ・ 藤四窯の発掘始末記                         | 4・5 |
| ・ 郷土史調査レポート 白蓮と足助                   | 6   |
| ・ 足助の町並み ～重要伝統的建造物群保存地区選定後の新たな取り組み～ | 7   |
| ・ 登録文化財 名鉄三河線旧西中金駅駅舎の曳家工事           | 8   |
| ・ 資料館ニュース                           | 8   |

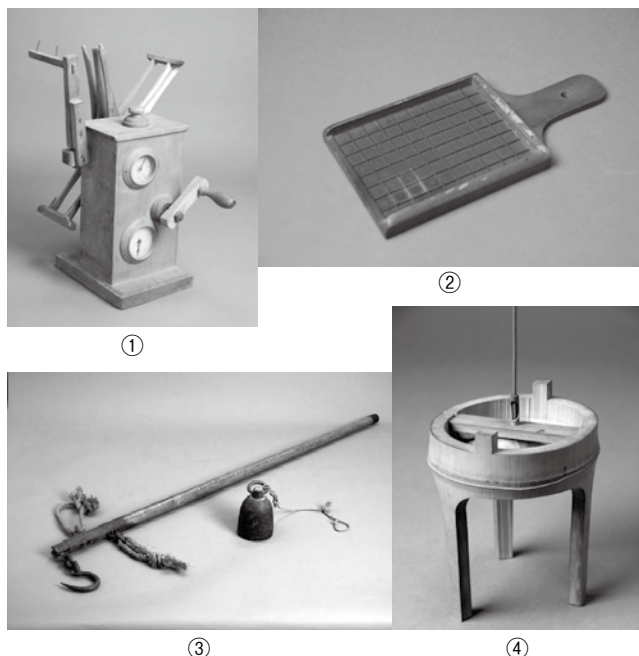
# ハカる

## 古い道具と昔の暮らし

### はじめに

電気機器が普及する前、もちろんコンピューターなどなかった時代に、人々は様々な工夫を凝らした道具を使って生活していました。毎年恒例の企画展「古い道具と昔の暮らし」では、今年は、はかる道具に注目します。

みなさんは以下の写真の道具が、何をはかる道具かわかりますか？



### 1 長さをはかる

現在では、長さや重さをはかるとき、メートル、キログラムなどの単位を使いますが、これは明治24年(1891)から使用されているもので、それまでは尺や貫しゃく・かんといった単位が使われていました。明治24年以降、メートル法と尺貫法の両方が使われていましたが、昭和41年(1966)にメートル法に統一されました。1尺は約30.3cmですが、裁縫用に鯨尺くじらじゃくという物指も使われました。鯨尺は1尺2寸5分の長さを1尺としています。

写真①は検尺器けんじゃくきという道具で、一定の重量に対する糸の長さをはかることで、糸の太さを割り出すために使いました。

### 2 量をはかる

米などの穀物や酒などの液体の量をはかるために

は、枡しょうごうが使われました。単位は升・合などを使います。豊臣秀吉が枡の大きさを統一したという話を歴史の授業で習いますが、米を税として徴収していた支配者にとって、枡の大きさが同じであることはとても重要なことでした。

写真②の銭枡ぜにますは、昔の長方形の貨幣を数えるのに使われました。銭の大きさに区切られていて、早く貨幣を数えることができます。

### 3 重さをはかる

重さをはかる道具として、はじめに登場したのが天秤てん秤です。左右の皿にはかるものと分銅ぶんどうを乗せて、釣り合わせることで重さをはかります。写真③は桿秤さおばかりといい、はかるものを鉤かぎにひっかけて紐を持ち、錘おもりを動かして釣り合ったところの目盛を読みます。江戸幕府は、江戸の守随家と京都の神家にだけ桿秤製造の権限を与えていました。

この他にも蘭秤やデニール秤など決まったものをはかるための秤や、市内の郷土遺跡ごうがみ いせき(渡刈町)から出土した古代の錘おもりと考えられる資料なども展示します。

### 4 時間をはかる

写真④の線香台は、お経を読む時間をはかるもので、台に立てた線香が燃え尽きるまでの時間ではかります。また、現代の腕時計の役割を果たすものとして、携帯用の日時計が使われました。

### おわりに

モノをはかるという行為は、昔から今まで生活に欠かせないものです。今回の企画展では、様々なはかる道具をご覧いただくとともに、桿秤や枡を使って、実際にモノをはかる体験をしていただけます。

(山田 佳美)

豊田市郷土資料館企画展(於：第2展示室)

「ハカる～古い道具と昔の暮らし～」

会 期：平成27年1月31日(土)～4月12日(日)

開館時間：午前9時～午後5時 入場無料

# 時を計る道具

## 文字盤には

かつて日時計や台時計の文字盤には数字ではなく、子・丑・寅…の文字が記されていました。旧暦では一日24時間を12に分け十二支であらわしていました。したがって2時間を「いっとき」、1時間を「はんとき」、30分を「こはんとき」と細かく分けていました。午の刻が12時の「正午」なりますので、それより前を「午前」、午の刻より後が「午後」となります。また「草木も眠る丑三つ時」は1刻を4つに分けた3つ目となりますので、丑三つは現在の2時から2時半までの間ということになります。そう言えば、「子午線」とか、「丑寅・艮（うしとら）」などという言葉は今も使われています。

## 線香で計る

二挺天符台時計は昼と夜の1刻の長さの違う「不定時法」にも対応している優れたものですが、このような精巧な機械時計は庶民には到底手が届くものではありませんでしたので、人々は線香が燃えた長さで時間を計っていました。長寸線香、長尺線香と称される線香は、経文を唱えたり、座禅を組んだりする時間を線香一本が燃え尽きるまでと定め、その時間を計るために用いられました。寺院にある「常香盤」は香をたやさず焚くための装置で、後に時計の役割を果たすようになったと言われ、「香時計」とか「時香盤」とも呼ばれています。

（東海民具学会 岡本大三郎）

■午時休線香筥（ひるどきやすみせんこうばこ） W107 H71 D358  
明治三十年六月 線香台底板の内側に「一時間七寸」とあります。



※上記の資料は、企画展「ハカル～古い道具と昔の暮らし～」にて展示中です。

## ■日時計

旅行などに携帯する、たためる日時計。  
WΦ59 H40



[稲武郷土資料館収蔵品]

## ■二挺天符台時計

（にちょうてんぷだいどけい）  
W265 H730 D265



[旧鈴木家収蔵品]



# とうしよ 藤四窯の発掘始末記

七原 恵史

旧藤岡村の古窯址を調査するきっかけは、杉浦知先生が加茂丘高校に勤務されていた頃、生徒から古窯があるという話を聞き、古窯の時期などを知る必要があるとされ、久永春男先生がこれを受けて実施した。

調査を行ったのは昭和45年(1970)12月29日、30日、翌昭和46年(1971)1月3日の3日間である。調査に参加した人たちが往復の手間が省けるように、国道沿いにある旅館あぶらやに宿泊した。当夜は冷えこみが強く、窓は二重になっていたが、風呂あがりのタオルはたちまち凍ってしまったほど冷えこんでいた。

発掘現場は旅館の前の道を横切り、前方の林の中のほぼ平らな山道を進んだところに池があって、池のそばに目ざす窯の灰原があった。いくつかの灰原の一つを選んで、もっぱら遺物の採集を行った(写真1～3)。窯の本体を把握することはできなかった。灰原を掘り進めると、遺物の間に、冬眠を始めた<sup>まむし</sup>蝮がいて驚かされた。

調査に参加したのは、久永春男、鶴田彦四郎、杉浦知、大橋勤、斎藤嘉彦、清水正明、矢田直幸、森達也、七原恵史、住吉政浩、広瀬栄一(白菊古文化研究所)各氏である。

調査終了後、遺物の洗浄、計測、原稿作成の分担を決め、散会した。しかし、その後発掘調査は増加し、杉浦知先生が奔走されたが、本古窯の結果を検討する機会はなく、今日までに至った。

<sup>すりばち</sup>

播鉢の大半は破片であり、計測したものは48点であ

る。このうち、底部から口縁にかけて残存し、辛うじて全形をうかがえるものはさらに少ない。

口径26cm～31.4cm、底径12.4cm～13cm、器高9.1cm～9.7cm、胎土は良好で堅緻であり、たたけば金属音がする。播鉢Ⅰ類で古瀬戸後Ⅳ段階後半と推定される。

採取された遺物には播鉢以外に碗類では天目茶碗、

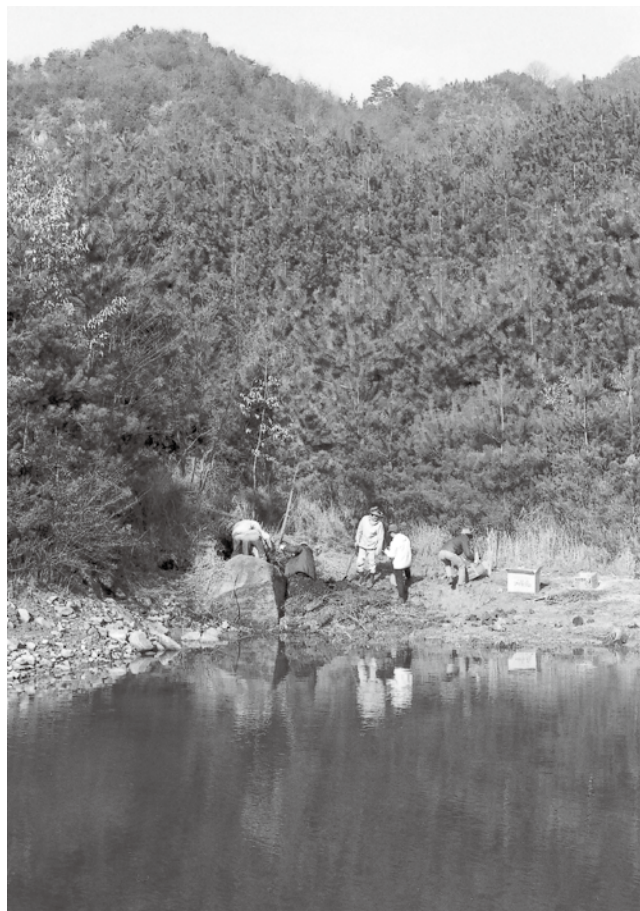


写真2 藤四窯発掘調査の様子(南東から)



写真1 藤四窯調査地点遠景(南東から)



写真3 藤四窯の灰原

平碗、皿類では緑釉小皿、卸皿、盤類では卸目付大皿、折縁深皿、壺類では祖母懷壺、広口有耳壺などが混在しており、藤岡地区でも瀬戸地方の窯業が広がっていたことがわかる。

昭和47年(1972)の雨台風で、藤四窯付近は土砂災害が起これ、古窯は滅失してしまった。

末尾ながら遺物の実測には蒔田すま子さん(新城市)の手を煩わした。また古窯の年代については、瀬戸市埋蔵文化財センター主任・青木修氏の御教示を得た。記して謝意を表します。

### 【補記】

昭和10年(1935)生まれの七原先生の本務は高校の先生でしたが、日本考古学協会会員というもう1つの顔をもっています。昭和30年代から数多くの発掘調査を手がけてこられた先生には、『ナナハラ先生の発掘物語』(中日出版社)という著書があるほどです。

このたび、藤岡地区に所在する藤四窯の発掘調査資料(陶器片549点)をご寄贈いただきました。調査にあたり先生たちが宿をとった「あぶらや」は、豊田市街から国道419号を北に向かうと、藤岡支所のある飯野の交差点に向かって下る手前の峠に現在も看板を残す油屋旅館のことと思われますが、ここから藤四窯までは直線で1.8km。寒空の下で現場に向かう山道は、辛くも楽しい道のりだったと想像されます。調査当時の藤四窯は、北一色町のため池(山ノ神池)の北端付近に灰原(窯からかき出した灰・炭や失敗品)が及んでおり、先生たちはそこを削って断面を露出させて(写真3)、調査を進められました。

年末年始を利用したまさに手弁当の現地調査が終わると、現在の行政発掘とは異なり、出土した陶器の種類ごとに整理作業の分担が決められていました。先生は主に播鉢の担当となり、そこで引き取られた遺物が今回寄贈されたわけですが、図1のような精緻な遺物

実測図が119点も作成されていました。

さて、現在の山ノ神池(写真4)は、緑の木々を静かに水面に映しています。当時の写真(写真1・2)と比較すると、池全体の形はおおむね旧状を保っているように見えますが、写真の人物の左手にある大石は見つけられませんでした。昭和47年に小原・藤岡地区などに大きな被害をもたらした、いわゆる47豪雨による影響を受けているようです。藤四窯の窯本体は、調査後に池の上方に建設された道路によって破壊されたことになっていますが、池のほとりには現在も陶器片が散布しており、灰原は残存している可能性が高いと考えられます。

出土した遺物の時期は15世紀代と考えられ、市内における古瀬戸窯の展開を考える上では、大変貴重な資料となります。調査に参加された11人のうち、久永・鶴田・杉浦・大橋・斎藤・森・広瀬の7人の先生たちはすでに故人となれましたが、調査により出土した資料は、豊田市の歴史を語る真実の断片として、大切に未来へつなげていきたいと思います。そのためにも、資料の全貌については、現在編さん中の『新修豊田市史』などで明らかにしていく予定です。

最後になりましたが、玉稿と写真のご提供を賜りました七原先生に心より感謝申し上げます。(森 泰通)



写真4 現在の山ノ神池

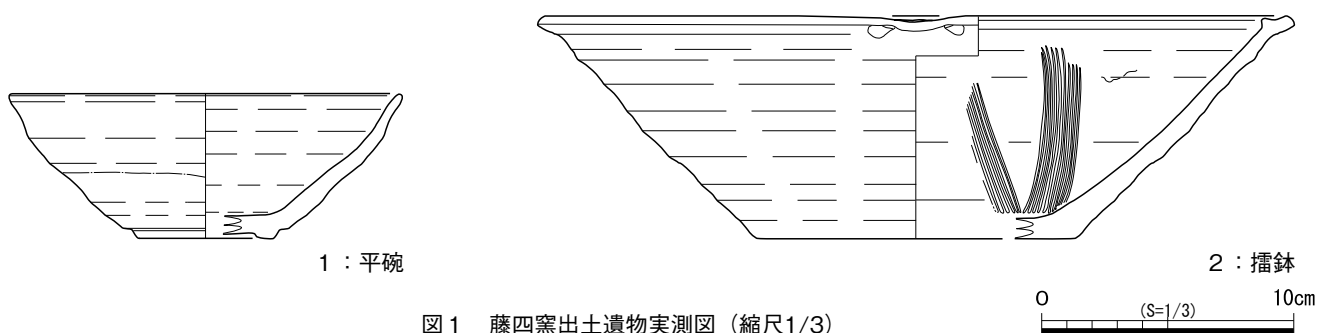


図1 藤四窯出土遺物実測図(縮尺1/3)



# 白蓮と足助

## 1 戦後の足助の文芸

昭和20年代から30年代にかけて、足助では俳句・狂俳・短歌が盛んに行われていました。

終戦直後の昭和20年(1945)秋に発会したのが、もみぢ俳壇です。ホトトギス派の俳人で、書画や足助氏の研究でも知られる野田子悠(本名鉄、号寛湖。1882-1963)を中心に、例会・塞馬忌等を開催し、昭和40年(1965)まで俳誌「もみぢ」を発行しました。

次に、狂俳の巴川舎水音の高弟として知られ、もみぢ俳壇の同人でもあった松井涙鳥(戸中町)が、昭和28年(1953)から狂俳誌「雲海」を発行しました。

最後に発会したのが、短歌の足助歌の会です。明治時代中頃から続いてきた真弓社が解散したのは昭和20年1月のことであり、9年後の昭和29年(1954)1月に足助歌の会が発会しました。



足助を訪れた柳原白蓮

## 2 足助歌の会

発会当初の足助歌の会は、加藤今四郎(下山地区の東大林町。1891-1978)を指導者として、もみぢ俳壇など足助周辺の人々を中心に例会の開催や月2回の会報の発行を行っていました。

今四郎は、足助地区の小学校で教師を勤めた後、昭和2年(1927)に名古屋市の東邦商業学校の教師となり、昭和6年(1931)には短歌誌「東邦」を創刊する等、幅広く活動した歌人として知られています。

## 3 白蓮と香嵐溪観楓短歌大会

足助歌の会は、発会翌年の昭和30年(1955)5月に第1歌集「鮎のかほり」を刊行し、同年11月には柳原白蓮(1885-1967)を招いて香嵐溪観楓短歌大会を開催しました。白蓮を足助に招くに当たっては、豊橋歌の会主幹の中野正人の尽力によるところが大きかったようです。

大正天皇の従妹にあたる白蓮は、平成26年(2014)4～9月に放映されたNHK朝の連続ドラマ「花子とアン」では蓮子として登場しますが、23歳で東洋英和女学校に入学し、後に翻訳者となる村岡花子と親交を深めました。同時に、佐々木信綱が主宰する短歌の竹柏会に入門し、九条武子と共に才媛の歌人として知られるようになりました。そして、25歳で九州の炭坑王伊藤伝右衛門と結婚しますが、36歳の時に東京帝国大学生の宮崎龍介と駆け落ちして伝右衛門と離婚、大正12年(1923)の関東大震災の後、宮崎家に入りました。戦後は、長男の戦死を契機に平和運動家として全国を行脚したといわれています。

香嵐溪観楓短歌大会の様子は、足助歌の会の「十一月歌集」(昭和30年刊行)に集録されています。

○11月1日

西中金駅(中金町)で白蓮を出迎える。自動車まで来て白鷺温泉(簗林町)に宿泊する。多くの人々がつめかけ、座談会を行う。

○11月2日

午前中は桑田和、午後は足助校(足助小学校)で講演を行う。

○11月3日

香積寺で香嵐溪観楓短歌大会が行われる。出詠者68名、出席者約50名で、出詠者の歌3首を白蓮・中野正人・加藤今四郎にそれぞれ1首ずつ分けて選をする。

○11月4日

午後1時頃、帰途につく。白蓮の滞在中、80数枚の短冊・色紙・懐紙・半切等に揮毫いただく。

なお、白蓮が戦時中にも足助を訪れたと伝え、足助に遺る短冊の中には戦時色の強いものもありますが、その足跡は何も遺されていません。

## 4 灯短歌会

足助歌の会の会報は、昭和32年(1957)から「灯」に改められ、月1回の発行となりました。そして、次第に参加する同人が県下に広がる一方、足助周辺の同人は数少なくなってきたため、昭和50年(1975)から旧足助町の公民館事業として短歌教室が開催されるようになりました。なお、「灯」は近年休刊になったと聞きます。

(鈴木 昭彦)

# 足助の町並み

## ～重要伝統的建造物群保存地区選定後の新たな取り組み～

平成23年(2011)に選定された重要伝統的建造物群保存地区の足助の町並みでは、町並み保存を進めるために町並みを活用した様々な取り組みを行っています。

まず、足助の町並みの価値と魅力を次世代に伝えるために平成25年度から名古屋市立大学鈴木賢一研究室と共同で、足助地区の小中学校を対象にワークショップを行っています。小学校の低学年では、町並みに親しむためにスタンプラリー形式のワークショップを行い、グループ毎に事前に与えられた「指令」に従って町並みを歩いて、スタンプを集めながら町並みについて学んでいます。中学年では、古い道具と昔の暮らしをテーマにして足助の町家で井戸の水を汲み、木桶に移して洗濯板で洗濯を体験したり、籠に乗って移動することを体験したり、防災をテーマにして昔の火消し道具を実際に使う体験をしました。高学年では、江戸期の町並みの絵図を見ながら中馬街道ちゅうまを実際に歩いて、昔からの町並みが今も残っていることを学んだり、明治時代の写真を見て町並みを歩きながら写真と同じ建物を探し、昔の建物が今も同じように残っていることを学びました。中学校の生徒は、11月の香嵐溪もみじまつりにあわせて開催された、普段は公開されていない町家の内部を公開する「あすけうちめぐり」のとき

に、事前に足助の町並みについて学び、当日の案内役を務めました。

また、今年度より新たな取り組みとして「足助町並みサポーター」を発足しました。「足助町並みサポーター」とは、足助や足助の町並みのことが好きで、足助の町並み全体を元気にする取り組みを住民の方と一緒に盛り上げる人たちです。9月にはサポーターの方に足助のことを知っていただくための基礎講座を開催し、足助観光協会会長の鱸雅守氏すずきに足助の地域の歴史やまちづくりの取り組みについて講義していただきました。また、豊田市文化財保護審議会委員の岩田敏也氏には足助の町並みを歩きながら、町並みの特徴や魅力を解説していただきました。さらに認定された6名のサポーターは、今年度は、足助の町並みのポスターや町並みをPRするグッズを作ったり、足助の町並みでワークショップを行ったり、足助の町並みの崩れそうな建物をきれいにする活動に取り組んでいます。

このように、足助の町並みでは、建物の修理だけでなく、町並み保存の担い手づくりにも取り組む活動も行われ、住民の方との共働によって、「足助らしさ」のある町並みに変化しています。(多和田篤嗣)



低学年向けワークショップのスタンプラリー



足助町並みサポーター基礎講座



## 登録文化財 名鉄三河線旧西中金駅 駅舎の曳家工事

名鉄三河線旧西中金駅駅舎・プラットホームは国道153号線沿いにあります。車窓からご覧になったことがあるでしょうか。一見、その変化に気付かないのですが、実はこの駅舎、今年度の国道拡張工事に伴い、従来の位置から2mほど曳家をしました。

登録文化財とは、平成8年(1996)の文化財保護法の改正で新たに導入されたもので、早急に保護及び活用の措置が必要とされる建造物や土木構造物などの建築後50年以上を経過しているものを対象に、国の文化財登録原簿に登録する制度です。豊田市内には、平成26年(2014)現在、8か所17件の建物が登録文化財になっています。名鉄三河線旧西中金駅駅舎とプラットホームもその1つで、平成19年(2007)に国土の歴史的景観に寄与しているものとして登録文化財になりました。現在も、線路とともにかつての終着駅の景観と歴史をとどめています。

今回の曳家は、国道の路線変更や道路形状の変更も困難なために、駅舎をプラットホーム側へ移動し、物置部分を撤去、建物南東庇を一部分除去しましたが、経年劣化による腐食が激しい材木は部分的に取り替える修復を施しました。是非一度、ご覧下さい。



曳家工事の様子

## 資料館NEWS

### 史跡めぐり「小原の史跡・文化財探訪」

10月7日(火)に応募いただいた市民の皆様と小原



地域の史跡、文化財を巡るツアーを開催しました。川見町の薬師寺、小原郷土館、市場城址などを巡り、秋晴れのなか楽しい一日となりました。

### 豊田市民俗芸能大会開催

10月26日(日)、豊田市民俗芸能大会を開催しました。

今年度は古瀬間ばやし保存会、杉本棒の手保存会、挙母祭中町子供囃子、四郷地区棒の手保存会、西山万歳保存会、大沼雅楽会の皆様にご披露いただき、市内に伝わる民俗芸能を知っていただくことができました。



### 地域学習サポーターが表彰されました！

11月8日(土)に開催された第34回豊田市社会福祉大会において地域学習サポーターがボランティア活動功労者として表彰されました。日頃の皆様の活動に感謝いたします。



### 特別展「自動車を楽しむ豊田英二～ものづくりのまち 豊田市へのあゆみ」9/27～11/30開催

英二氏の生きた100年と挙母町から豊田市への発展の歴史を重ねあわせ、将来のまちづくりに想いをはせる機会となりました。多くの皆様にお越しいただきありがとうございました。(入館者4,587人)



### 利用案内

|      |                                                                                             |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 開館時間 | 9:00～17:00                                                                                  |
| 休館日  | 毎週月曜日(祝祭日は開館)                                                                               |
| 入場料  | 無料(特別展開催中は有料)                                                                               |
| 交通   | 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分<br>名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分<br>愛知環状線「新豊田駅」より 徒歩15分<br>とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ徒歩5分 |
| 駐車場  | 約20台                                                                                        |

### ■豊田市郷土資料館だより No.90■

平成27年1月16日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。